

九戸村立江刺家小学校実践区

- 「テーマ」
- 震災を超えて・新たな教育課題への取組
組織の見直し・地域コミュニティ再生の取組
 - PDCAサイクルによる推進の取組
年間を通じた全県共通課題・モデルプログラムの取組
 - 地域ぐるみによる「いわての復興教育」の取組
防災教育・被災地支援交流・地域を担う人材育成の取組

活動の様子



『食育をいつやるか？今でしょ！』

～食育を通じた地域との連携の輪 江刺家小学校収穫祭までの過程～

1 地域の教育課題

- ・九戸村だけでなく全国的にも話題となっている“食育”について、東日本大震災での「放射能汚染」。食の安全性が問われている今、農業体験活動を通じて子どもたちに食育・農作業の大変さなどを学ぶ必要がある。
 - ・こういった活動を通じて“学校と地域とのつながり”を継続的かつよりよいものにしていく必要がある。
- <課題の裏付けデータ>

2 役割分担と年間の計画

- 課題解決のためのそれぞれの役割
- <子ども>
 - ・普段口にしていない“米”の栽培方法を、体験活動等を通じて学ぶ。
 - <保護者>
 - ・子どもたちが行う農業体験等に参加し、子どもと一緒に食育について考える。
 - <先生>
 - ・農業体験等の準備・補佐などを行う。
 - ・体験活動の広報・地域住民への活動参画を促す。
 - <地域>
 - ・“地域の先生”として色々な活動に参加していただき、学校だけでは学ぶことの出来ない部分を子どもだけでなく親にも指導していただく。
 - <行政>
 - ・児童の畑・田んぼへの送迎や物品の貸し出しなど、準備・補佐を行う。
- 課題解決のための年間の取組
- 4月：稲の種まき
 - 6月：田植え
 - 7月：田の草取り
 - 9月：稲刈り・はせがけ
 - 10月：脱穀
 - 11月：収穫祭

3 取組の様子

- ・種まきから稲刈り、脱穀までの多くの行程を機械に出来るだけ頼らず手作業で行った。草取りや脱穀では昔ながらの道具(除草機・足踏み脱穀機等)を使い、子どもたちに農作業の難しさや、普段触れることのない道具や土の感触などを体験した。その際には、地域住民の方の指導も入った。
- ・収穫祭では、子どもたちが育てたもち米をみんなで餅つきし、雑煮やきなこ餅にして食べた。餅つきではお父さんたちが子どもの補助につき、全員で餅をついた。雑煮の下準備にはお母さんたちが行った。
- ・収穫祭には保護者の方だけでなく、収穫までの行程で関わった方々や地域住民も参加、お餅・雑煮が振る舞われた。
- ・食事の際には、江刺家小学校の児童と、同村にある県立伊保内高等学校の「郷土芸能委員会」による「江刺家神楽」が披露された。招待された地域住民の方々にも非常に好評だった。小学校の実践区活動における5者の関係の中に高校生も関与しているところが、江刺家小学校収穫祭の特徴でもある。
- ・子どもたちによる発表(種まきから稲刈りまでの行程について)が行われた。また、畑と田んぼ・農機具を貸していただいた方から、食育・米を育てる難しさなどをお話していただいた。

4 課題解決を判断する評価の方法

- ・「食育を行う」という点については達成できたと考える。しかし、それがどうかたちで子どもたちに表れるかは、これからの経過を見ていくしか方法はない。「食の大切さ」をこういった活動で子どもたちが体験・理解し、子どもたちがそれを実行することで、親が重要性に気づき、学校・行政が学びの場・機会を提供し、地域と共に築き上げていくことが、これから先の課題でもあり、進めていかなければならないことである。